

高校生

キャリア白書

2024

HIGH SCHOOL
CAREER WHITE PAPER
BY ATTEME

キャリア選択の 全体像

意志ある、豊かな選択のための未来事例



PREFACE

はじめに

進路指導やキャリア教育に携わっている方は、高校生から「とりあえず進学する」という言葉を一度は耳にしたことがあるのではないのでしょうか。

そんな時、わたしはいつもこう言います。「せっかく進学するなら、ただキャンパスライフを楽しみに行くだけでなく、進学先での2年間、4年間で何を学びたいか、どんな経験がしたいか目的をもっていかないと、人生の時間とお金もったいないよ」

そうすると「やりたいことがないし・・・」「まだ働きたくない。遊んでいたい」「高校から働くより、進学したほうがいい会社に入れそう」「とりあえず進学はしておけと親に言われてるから」といった言葉が返ってきます。

もちろん、進学することは魅力的な選択肢です！しかし、進学目的が明確でなく、多額の奨学金を利用した先に、中退や就職活動での失敗、その後の返済で苦労している若者も多く見られました。

一方で、高卒新卒への求人数は増加を続け、工業高校を筆頭に大手企業へよい条件で就職することも選べる時代となっています。大卒新卒で中小企業に入社するよりも、高卒新卒で大手企業に入社する方が生涯年収は高くなる事実があります。

若者が減っていく中で、高卒・大卒と学歴で区分しては人を採用できない時代となり、企

業側も能力があれば学歴区分なく評価しキャリアアップの機会を提供していくことが当たり前の社会になりつつあります。

数年働いた後、学びたい分野が見つかり、貯めたお金で進学するという、まさにリカレント教育を体現する高卒就職者もいます。『進学も就職も、共に魅力的な選択肢』になりつつある、今。「主体的に自分のキャリアを選択してほしい。」

そんな思いで高校現場で様々なアプローチを行う学校、先生、団体・組織、専門家がいます。弊社では「高校生インターンシップ」を入口に、進路多様校から進学校、全日制から通信制まで、日々、多くの生徒さんや先生方と接し、高校生のキャリア観の変化を多く目の当たりにしています。

これを皆さんと共有することで、同じ想いを感じている方と繋がり、新たな高校生のキャリアを探究していければと、白書の作成に至りました。偏差値を上げて有名大学に進学すればそれでいいという進路指導から、変わるべき時がきました。

大学へ進学した後、さらに経験を積み活躍するために、高校時代に必要なことはなにか。

高卒就職希望者はもちろんのこと、いつか社会に出て働き始める10代が高校時代に経験しておくべきことはなにか。

本書が、それらを考える一助となることを願っています。



株式会社アッテミー / 代表取締役

吉田 優子

Yuko Yoshida

INDEX

01	概観	01
02	特集	02-07
	- 早活人材が映す社会の変化	02-03
	- 社会課題解決と価値共創に活かせる探究アプローチとは	04-05
	- アプレンティスシップとその実践	06-07
03	実践事例集	08-15
	- 高校生インターン2年間の実施報告 ロート製薬×アッテミー	08-09
	- IT×高校生インターンの実践 LINEヤフーコミュニケーションズ株式会社	10-11
	- 工業高校におけるキャリア教育 佐野工科高校	12-13
	- 教員対談 西大和学園高校×福岡女子商業高校	14-15
04-1	若者たち-自分らしいキャリアを突き進む	16-21
	- komatsu	16-17
	- 山西 咲和	18-19
	- 中島 知也	20-21
04-2	若者たち-「早活人材のその後」を知る調査	22-25
	- 数値から	22-23
	- 語りから	24-25
05	まとめ	26-27
	- 高校生に必要な環境のヒント 若者にいかにして力を与えるか?	26
	- 編集後記	27

OUTLINE

概観

1990年代半ばから2010年代序盤に生まれた世代を指す「Z世代」。この世代はデジタルネイティブ、SNSネイティブとも呼ばれ情報環境に恵まれている世代であると広く認識されていますが、彼らの関心は身の回りにいる人々やSNSで繋がっているコミュニティに限定されていて、実際にはその視野は狭いまなのです。また、日本国内ではその人口の少なさから企業が展開するマーケティング戦略においても中高年や高齢者と比較して軽んじられる傾向にあり、彼らに対する理解も一面的であると言えます。

そんな社会に変化のきっかけを生み出すべく、株式会社アッテミーは18歳での「意思ある選択」を支援する事業を展開してきました。高校、企業、そして高校生と関わる中で課題意識としてあるのは、高校生が高卒で就職を目指す際の選択肢の少なさです。高校生向けインターンシップマッチングサイトの運営や、学校単位での高校生インターンシップの企画・運営、そして、企業向けに採用コンテンツ改善のためのサービスを提供する中で、企業が高校生に対して抱えているイメージと、実際の高校生との間には大きなギャップがあることに気づきました。企業は若者のニーズや能力を十分に理解できておらず、若者もまた、大人たちの前で自分たちの能力を適切に表現する場を持っていないのです。

加えて、探究学習の必修化、総合型選抜の拡大、通信制高校やタブレット端末を活用したオンライン学習の浸透など、近年、若者を取り巻く状況は目まぐるしく変化し、それに伴い若者のニーズも多様化する一方で、社会がそれに対応しきれていないのが現状です。先述したようなZ世代の情報に対するアクセス力の高さや発信力の強さは、これまで日本社会に生きる人々の間で弱点となっていた部分でもあり、これらは今後ますますグローバル化が進む世界で大きな武器となるでしょう。しかし、それを実現するには社会全体でZ世代の特徴や行動傾向を正しく理解することから始めなければなりません。

そこで、この課題に対して企業や学校単位ではなく、社会全体で広く、そして共に動くための呼びかけとして、公的データやこれまでの弊社の取り組みから見た高卒就職に関する現状、高校生向けキャリア教育の事例、有識者インタビューを白書としてまとめ、一般に公開する運びとなりました。本書がZ世代の取り組みを応援したいと願う読者の皆様にとって、彼らと共に未来を築いていくための一助となることを願っています。



古屋 星斗 SHOTO FURUYA

一般社団法人スクール・トゥ・ワーク代表理事

PEOPLE
01

社会人になる前に、様々な社会活動やビジネス経験を積んでいる若者が、「早活(そうかつ)人材」と呼ばれ、注目され始めています。そうした早活人材が出てきた背景やその存在からわかることは何か。キャリア教育事業を行い、民間研究機関では次世代の若者のキャリア形成について研究もされている古屋さんに、早活人材当事者がお話を伺いました。

01 注目された背景

金杉 近年注目されている早活人材ですが、どのような背景から注目され始めたのでしょうか。

古屋 企業に人材育成をする余裕がなくなり、入社前の経験の有無がその後のキャリアに大きく影響するようになったことが背景です。

企業の日本的雇用慣行が崩れ、長時間働かせて育てることも難しくなったため、なるべく即戦力を採用したいと考えるようになってきました。そこで何も経験がない他の学生と比べて、起業やインターンシップをしてきた優秀な早活人材が注目されるようになりました。

調査によると入社前の社会的経験が複数回あった新入社員は4割以上にのぼっています。

金杉 入社前の経験に多様性が出てきて、それによってスタートラインが全く異なるからこそ、活動する若者が増えてきたんですね。

02 消費されるガクチカ

古屋 注目される前もちろん早活人材はいたんですよ。いたんですけど、学生時代のお遊びだと言われてきたわけです。今でも普通に就活をされると言われるかもしれません。

多くの管理職は、学生時代になにをやっていたかは関心がないんですよ。なぜならば彼らの時代彼らが若手だったときに、企業が手をかけて育てることができるから、意味がなかったんです。

金杉 よく就活ではESで「学生時代に力を入れたこと」、ガクチカを書きますが、それは以前はなかったんですか？

古屋 ガクチカは前からあったんですよ。ただ、単なるガクチカに過ぎなかった。つまり、就活で消費されておしまいなんです。私が言いたいのは、そのガクチカは単なる採

用のための材料ではなく、入社後の企業における育成やキャリア支援に生かせる情報だということなんです。

実態として何が起きているかというと、採用の担当者から、配属先の管理職にガクチカの内容が伝達されることはほとんどないんです。だから本当にもったいないんです。

金杉 たしかにもったいないですね。学生時代にやっていたことがわかれば、どんな仕事や役割を任せると即戦力としてアサインできるのかがわかりますね。

03 自己紹介の仕方から見られる価値観の変化

古屋 こうした変化は、若者の自己紹介の仕方にも影響を与えているんですよ。昔だったら普通は「株式会社〇〇の山田です」とか、「〇〇大学の山田です」と所属から入りますが、最近は名前から入って、その後に自分の経験や関心について話す若者が多いと感じませんか？例えば「山田です。キャリア教育に関心があって、こんなスタートアップで働いています。」のような形です。

金杉 それ、本当にわかります。私もその自己紹介の仕方をよくします。所属先から話すと曲解されそうで怖いんですよ。例えば私は青山学院大学に通っているんですが、それを先に話すと「表参道のキャンパスでキラキラしてそう」「遊んでそう」と思われやすいんです。自分が伝えたいことはそれではなくて、お互いの関心を知って、それから話をしたいんです。

古屋 そうですよ。これはなにが起きているかというと、自分の肩書きや属性が自分を表すシェアが小さくなってきているということなんですよ。所属や学歴ではなく、最新の学習歴や活動歴が自分を表すようになってきています。

04 いかに関機を産むか

金杉 ここまで会社目線の話でしたが、視点を変えると会社が育ててくれなくなって、それで活動することを迫られる社会ってかなり息苦しいのではないかと思います。このことについてはどう思いますか？

古屋 経済社会の変動と著しい人手不足・人材獲得競争の激化によって、大手企業ですら育てる余力がなくなってきたことがわかっています。

ただ、10年前は会社が全部決めていた。配属先も上司も仕事内容も。こういった状況を「ガチャ」と言っていたし今でもそういった企業はたくさんあるわけですが、この「ガチャ」のある会社と自分の活動で自分のキャリアを作ることができる会社、このどちらが良いのかという選択なのですよね。

あとは、学校が外部連携をして活動する機会を作っていくことも大事ですね。日本の学校教育って、PISA調査ではトップレベルなんですね。ただ、それとは別に学習の自立性が最大の弱点になっています。つまり、能力は高いけど学ぶ動機がないんです。だからこそ学校が生徒を外に出して、半強制的にきっかけを作っていく必要があります。

金杉 確かにそうですね。とはいえ、そのバランスも大事ですよ。言い訳だけで終わってしまうと、志みたくないものも出てきづらいのかなと思います。そんなバランスのとれた動機を得る体験を学校や社会全体でどうデザインできるのでしょうか？

古屋 それはぜひ考えていただきたいことですね。全くご指摘の通りですよ。そこで体験の意味づけをするサポーターが必要になってくると思います。

その活動にどういう意味があったのかということイメージ付けてあげないと本当に単に授業でやりました。入試のためにやりました。だけで終わってしまうんですよ。

例えば大学のインターンシップはいい経験になるんですけど、それは自分の人生にとってこんな意味がある。社会にこんなインパクトがあるんだ。と意味を提示することで初めて動機が得られるんですね。

05 早活と余白

金杉 私は活動をしていて、よく「学生で自由時間が多いんだから、もっと余白を持った方がいいんじゃない」と言われるんですが、これについてはどう思いますか？特に高校生は勉強や部活に加えて、もう一つ活動も、となったらかなり忙しくなるのではと思います。

古屋 忙しい学生生活を送っているのですよね。健康には気を付けてくださいね。

率直に言って余白があるってことは、差がつくってことなんです。企業が長時間残業をさせて育てるという育て方は

法改正で難しくなり、若手に自由な時間、可処分時間が増えた。その結果自主的にいろいろな機会に飛び込める人と、そうでない人に差がつかます。

かつては平等に職場に閉じ込められて鍛えられたわけですから、そこでは差がつかなかったんですよね。なので余白それ自体には良い面も悪い面もある。

ただ、そうですね、今の問題は心の余白がないということが大きいと思います。物差しが多様ではない。学校以外に居場所がないからいじめ問題が重要になってくるし、先生たちも学校の外に相談員がないから自分が取り扱わなければならない問題が大きくなる。

時間の余白は作れないかもしれない。でも、多くの価値観を持った人が関わることで心の余白は保たれるかもしれません。

金杉 人によって差はありますが、自分自身は忙しくて今はあまり辛いじゃないですね。それは、価値観の多様な場所にあちこち行っているからなのかもしれないです。

06 早活人材のこれから

金杉 それでは最後に、早活人材の未来についてお聞きしたいと思います。これから早活人材は社会の変動によって増えていくのでしょうか？それとも、大人たちの関与によって増やしていかなければならない存在なのでしょうか。

古屋 企業がゼロから育てられなくなってきているため、早活の重要性は徐々に高まっていくでしょう。

早活をしているんだけど、良い経験をしているんだけど、それが意味づけられていない人も多いのもったいないことでもあります。

そう考えると大事なものは、早活人材をひとりにしないこと。まわりの大人、まわりの友人知人と交わることで始めて一人一人の経験が豊かな今後の人生を送るためのものとして意味づけられていく。

これを進めることが私やアッテミーさんの使命なのかなと思っています。

金杉 早活人材という概念を拡張し、高卒就職者も含めてエンパワーされる社会を作っていきたいですね。

ありがとうございます。

INTERVIEWER



株式会社アッテミー / インターン生

金杉 龍吾

Ryugo Kanasugi

青山学院大学4年生



佐藤 真久 MASAHISA SATO

東京都市大学教授

PEOPLE
02

探究活動や高校生インターンが増えている一方で、特に学習の質や経験の質、企業や地域の受け入れ体制に課題があります。高校生が社会を変える主体として活躍していくためには、どのような変革としくみが必要なのでしょう。協働ガバナンスや社会的学習、中間支援機能などに関して研究・実践を行っている佐藤真久さんにお話を伺いました。

01 高校生が現場に 飛び込むために必要な準備

東本 弊社では高校生向けインターンシップを企画・運営していますが、高校生がそこに飛び込むためにどういう準備が必要だと考えていらっしゃいますか？

佐藤 教科横断型の思考・発想と肌感覚で社会に関わる場づくりがまず大事だと考えています。

小学校の時って、生活科とか総合とか、教科横断的な取り組みが多いですね。それが中学、高校へと学年が上がっていくにつれて、思考・発想そのものが教科単位になってしまいます。その何が問題かという、いろんな思考・発想がだんだんと縦割りになってい、自分たちは得意科目以外の思考・発想を生かすことができなくなってしまうんです。それとは対照的に、インターンの魅力はいわゆる総合的な思考・発想力を鍛え、状況的に対応をしていくことにあります。このように、インターンでは学校ではなかなか実施しにくい学びと経験の場を提供していると言えます。それに加えて、きちんと肌感覚で社会に関わることが必要です。従来の課題ありきの調べ学習で探究活動をやる人たちと、もっと現場に行って探究活動を深める人たちとはかなり差が出てきます。私は、統合的な課題解決と価値共創に向けて、社会と連動をした探究アプローチとして「WW型問題解決モデル」を提案していますが、そのモデルにおいて、「探検モード」の重要性を指摘しています。つまりちゃんと肌感覚で社会に関わることをやらないと、高校でいくら課題ベースの探究活動をやっても、自分のものにならないんです。

東本 社会課題を解決するためのインターンがありますが、その中で現場を体験したり、あらかじめ課題に触れていないと自分事化されないということですね。

佐藤 そうなんです。よくあるケースとして社会問題、社

会課題について自分で調べますが、自分事化されてないから課題解決にむけて自身のエンジンがかからない。それらを踏まえ、「WW型問題解決モデル」では、二つの重要な点を強調しています。

一つ目は、「思考と経験を反復させる」ことです。まずは自身で考えるという思考と、他者との関わりの中で経験をす、その反復が重要であるということです。

二つ目は、「ステップ1」としての探究の前の「探検モード」、つまり肌感覚で経験をしないと自分事化されないのです。与えられた課題ありきではなく、とにかく現場に行くことが重要です。だからこそ、その[ステップ2]に行く前の[ステップ1]で肌感覚の経験をし、自身の思考との反復を重要視していかないと、結果的にエンジンがかからない。

これは今の学校で見落とされている点で、様々な経験をしたり、掘り下げたりする「高度化」はいろんな高校で行われていますが、自身にエンジンをかけ、社会に関わり続け、探究を自身で運用するような「自律化」はとても弱い印象を受けます。

02 アイデアを実行に 移すために必要なこと

東本 社会課題に対して危機感を持ち、いわゆるビジコン的なアイデアを持っている高校生たちは多い一方、その解決策を実行するためにあなたは何をしますか、と問うと、言葉に詰まることが多いと感じます。

やっぱり自分事ができてないのかなと。やっぱり社会問題は社会問題で、自分で切り離されたところにあるんです。

佐藤 なぜそこで詰まるのかというと、結局「WW型問題解決モデル」の[ステップ3]と[ステップ4]だと思うんです。それらは何かというと、「システム思考」と「デザイン思



『探究×SDGs“地域の課題解決のコツ”』（朝日新聞社、2020年4月1日発行）より引用

考」です。

「システム思考」では物事を繋げ、多角的に捉えること、「デザイン思考」ではありたい社会を描き、その達成への道筋を考えることが本質なのですが、いずれも1人ではできないことです。

だからその社会課題に向き合うときに、自身のみで解決しようと思わず、常に他者との関わりの中で最適解を更新できる、自身と違う見方・考え方を持つ仲間が必要です。これは日本の学校教育の問題でもあります。

チームワークを通して、複雑な問題に向き合い、最適解を更新できるプロセスを体験する作業が必要だと考えています。

進学校に在籍する生徒さんが課外活動で頑張る理由として、コミュニティや、自分と一緒に高め合える仲間をすごく大切にしていることが多いと感じます。でも企業さんは割と対個人で自分の会社を見てほしいじゃないですか。そこでも少しギャップがありますよね。

そこで何が重要なのかというと、企業以外で働く環境も作っていかなくちゃいけないということです。

例えばSDGsに対する取り組みを企業が始める時に、ある程度金儲けになるのかとか、ちゃんとそこで事業採算性がとれるかってことを考えて、その中で社会課題を解決しようという考え方をしていますよね。

一方で高校生の人たちは企業の中で働く意味がわかってないじゃないですか。だからこそ企業以外にもNPOとか自治体とかいろんな体験の場を用意しながら、その中で求められる物事の規範となる見方・考え方を身につけ、それぞれのステークホルダーが持っている基本となる動機を組み合わせで解決していくことができる環境が必要です。

03 これからの高校生インターンに必要な要素

東本 企業が高校生向けインターンを始める際、どうしても大卒人材をベースに考えてらっしゃるので、やはり高校生に刺さらないことがあります。高校生向けインターンにはどういう要素が必須だと思われませんか。

佐藤 私自身、様々な高校のアドバイザーをしています。重要なのは、高校生たちの方が、大学生より純粋なこと。社会の問題を自身の将来と重ねて捉えている。大学に来ると専門分化するので社会の問題に対して、自身の規範性と、組織論と立場論の中で見る癖がついてしまう。自分の見方・考え方が固定された中で、社会に関わろうとする。そうすると高校生の方が魅力的で、その社会の問題を純粋に見られる、規範性が未分化であるという特徴があります。

それは、企業が変化の必要性に気づけるかという話でもあります。企業もこれまでのように事業採算性で物事を捉えることから、SDGsやESG投資を踏まえて、地域に関わり、環境も自然も良くしながら企業も豊かになるという発想に変えることができている状況があります。

INTERVIEWER



株式会社アッテミー / インターン生

東本 美紀

Miki Higashimoto

津田塾大学4年生(取材当時)



毛受 芳高 YOSHITAKA MENJO

一般社団法人アスバシ 代表理事

PEOPLE
03

イギリスで力を入れられているアプレンティスシップ制度が今、キャリア教育関係者のなかで注目されています。アプレンティスシップとはそもそも何か。どんな意義があるのか。一般社団法人アスバシ代表理事の毛受芳高様にインタビューをしました。

01 アプレンティスシップとは何か

金杉 最近注目されているアプレンティスシップ制度ですが、そもそもアプレンティスシップとはなんなのでしょう？

毛受 アプレンティスというのは、直訳すると「弟子」とか、徒弟制度の「徒弟」というような意味です。つまり、見習い・訓練生という立場で仕事の現場に入って学んでいくという、これまでもあった人材育成をプログラム化したのがアプレンティスシップです。これにイギリスがかなり力を入れて、社会制度として整えたものが現代型アプレンティスシップ(modern apprenticeship)と呼ばれるものです。伝統的に徒弟制度があった技術職などの分野だけではなく、これまでにはなかったITや医療、弁護士や医療などあらゆる業界でアプレンティスシップが提供されるようになっており、現場でのOJTと、座学的学びのOFF-JTのバランスが整えられた有力なキャリア選択として年々広がっています。

金杉 なるほど。あくまで現代版の弟子入り制度ということなんですね。ところで、インターンシップとはなにが違うんでしょうか？

毛受 本来の言葉の意味で比較すると、元々インターンというのは教育プログラムの名前なんですね。それに対してアプレンティスというのは、「弟子」や「見習い」なのですから現場のなかでの立場そのものを指す言葉です。

インターンという言葉が日本で最初に使われていたのは医師教育です。医学生が実践的に現場で学ぶ＝「インターンする」という形で、医療現場に入って学んでいた。学校の中から、一度外に行き、学校に帰っていくプログラムがインターン。すなわち学校があることが前提で、比較的短期のものが多かったです。

それに対して、アプレンティスシップというのは、学校は必

ずしも前提でない。ある仕事のプロをめざすとき、その世界に見習いとして入り、長期間にわたり技術やプロとしての意識なども含めて学びながら、収入を得ているところが大きな違いです。ただ、インターンも長期のもので、収入を得られるものもありますし、インターン生という「立場」という意味としてもつかわれるようになったので、この線引きはわかりにくくなっていますが。

02 日本にアプレンティスシップをどう取り入れる？

金杉 このアプレンティスシップを日本の中で、どう取り入れようとしているのですか？

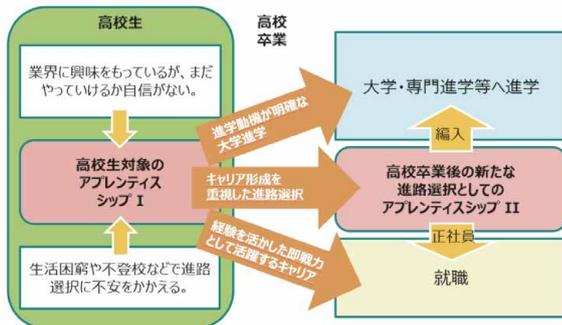
毛受 日本でアプレンティスシップを取り入れるタイミングとしては2つあると考えています。ひとつは、イギリスと同じように、高校生から卒業して「アプレンティスシップ」というプログラムで企業に入るやり方。これを私たちは、アプレンティスシップIIと呼んでいます。これを実現するのはもう少し後だと思います。

もうひとつのタイミングは、高校生段階です。これをアプレンティスシップIと呼んでいます。つまり、高校生が、アルバイトのように働いて収入を得ながら成長していくアプレンティスシップです。アルバイトと違うのは、収入を第一の目的とせず、技術やその業界でプロになることを意識して働く機会ということです。

アプレンティスシップは、日本においても新しいことではなくて、高校生にとっても、1980年代までは、様々な仕事の世界が近かった。業界の人と繋がっていたら「ちょっと人足りないから来てくれ」と言われて、現場にかりだされ、自分のキャリアのきっかけになるものと出会うことがあった時代です。たとえば、プロデューサー・作詞家の秋元康氏も、本当は官僚になりたかったようだけど、高校生時代

には番組への投書がきっかけで、テレビ局に呼ばれ、放送作家の見習いのような立場で経験をつんでいったといいます。現場がもっと混沌としていたので、様々な仕事で周辺参加できたんですね。

しかし、今は、高校生のアルバイトできる仕事も、飲食やスーパー・コンビニぐらいしかなく、そのため高校生の働く動機はお金のためだけになっているケースがほとんど。そもそもアルバイトが禁止もしくはかなり許可制の高校がほとんど。だからこそ「働きながら学ぶ」という従来からある道を、再整備して広げていく必要があると考えています。



03 介拓プログラム

金杉 アスバシさんでは高校生が介護施設で働きながら資格取得できる「介拓プログラム」を実施されていますが、これは従来のインターンシップと比べてどのような効果がありましたか？

毛受 10年くらい前から高校生インターンをやり続けていたけど、インターンとその後の進路選択の間にはまだ距離があって、インターンですごく良かったけど、進路としては決めきれない。その一回だけでは、ファイナルアンサーにはできないのも当然です。だから、よくわからないので、「とりあえず大学に行っておくか」という選択になってしまっていました。

ただ、アプレントイスシップでは実際に現場に入り込むことで、より実際に働くことに近い形で経験ができ、その後の進路に具体的なキャリアデザインすることができますね。介拓では、不登校を経験した生徒が多く参加しているのですが、プログラムを通して物事に対して積極的に参加できるようになったという声がありました。その後進学するにしても、「利用者の気持ちを知るために心理学を学びたい」、「社会福祉士の資格も取りたいので大学に行く」という具体的な目標を持っていました。



04 アプレントイスシップが普及するとどんな社会になるか

金杉 そうしたアプレントイスシップの機会が普及していったら、どんな社会になると思いますか？

毛受 日本でアプレントイスシップが普及していくと、大学に行かなきゃ、いい就職ができないという神話がなくなると思います。大学には、いい就職へのキャリアステップとしてなんとなくよさそう、と考えているだけで大学を選択しています。イギリスでは、大手企業へもアプレントイスシップルートで就職できるルートも確立されており、そうになると、本当に学問をしたい人が大学に行くようになるのですから。就職と進学を対等に捉えられるくらい、「就職」も含めて、働きながら学ぶキャリア選択が魅力的になれば、大学も本来の価値に立ち戻れるんじゃないかと考えています。

金杉 それはとてもわかります。私は学問をやりたくて大学に進学したんですが、ゼミで積極的に大学生に質問すると「勤弁してくれ」「みんなそんなつもりで大学に入っていないだ」と言われます。

毛受 それでは大学の先生も、純粋な動機で大学を選んだ大学生もたまらないですね。今の状況は、大学の本当の価値も貶めてしまっていると思います。

05 メッセージ

金杉 それでは最後に、教育関係者や採用担当者に向けてメッセージをお願いします。

毛受 もう若者が不足していく時代の本番はここからですよ。もう凄まじい勢いで子どもたちが減っていく段階にここから入ります。実数として減っている上に、そのなかで自信のない若者で社会にでるのが怖いと思う子が増えていく時代です。私たちは、若者に投資をして成長する機会を提供しないと立ち行きません。若者がいなくなり、学校も減って、また若者がいなくなる。最後は、地域も学校も立ち行かなくなる。

それでも、地域や業界が可能性を見出すために、このアプレントイスシップは新しい可能性を秘めているので、いっしょに新しい実践例をともに作り出したいです。

INTERVIEWER

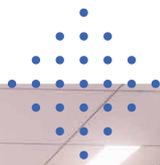


株式会社アッテミー / インターン生

金杉 龍吾

Ryugo Kanasugi

青山学院大学4年生



高校生インターン2年間の実施報告

ロート製薬 × アッテミー



株式会社アッテミーはロート製薬株式会社での高校生インターンのコーディネーターを務め、これまでに2度、早活人材とロート製薬をつなぐ実践に取り組んできました。これまでの現場の中からどんな意義や課題が見えてきたのでしょうか。アッテミーから報告します。



それぞれのコンセプト

まず、第1回の開催に至った経緯は現時点の学歴ではなく、本人の学びたい、挑戦したいという意欲に応え、活躍のフィールドを作りたいということでした。また、現在の日本の高校のキャリア教育ではその業界・職場への適応にとどまり、実践的な場で自分の関心をもとに社会的な変化を起こしていく方向性が足りないということも開催に至った経緯の一つです。人事の目線では、現在の大卒中心の採用から、高卒や高専卒など、多様な人が集まることで起こるイノベーションを起こせる組織づくりを見据えて、大学生ではなく、高校生たちと1週間関わる機会を作りました。

2回目のコンセプトはそれを引き継ぎつつも、「アントレプレナーシップ」を中心に据えたプログラム作りを行いました。ロート製薬ではインターンシップ企画以前から「明日ニハ」という社内起業の仕組みがあります。そのスキームを活用し、プロジェクトを始めたい高校生を対象に、実践を見据えた泊まり込みでのインターンシップを企画しました。また、特に二回目ではロート製薬社員の、高校生との議論を通じた変容にも焦点を当てていました。活動的な高校生と接することで積極的に社内起業などに挑戦する機運を作ることも狙いでした。

それぞれの内容

第1回、第2回ともに高校生が各自のプロジェクトを持ち、各々でリサーチやプラン作成を行いながらも共通の研修機会を設ける形で実施しました。第1回の研修では、フィールドワークや社

会問題解決のフレームワークについてインプットした上で、高校生同士での意見交換を行いました。また、社員の皆様との交流の機会として、マーケティング部や人事部とのディスカッションを行いました。

第2回は、第1回よりも短期間での実施となりましたが、スタッフと泊まり込みで実施したことにより、密度がより濃くなった印象でした。また、共通の研修機会も、起業家の講演や社内起業に挑戦する社員のみならずとディスカッションする時間を設けました。

各回の参加者の様子

<第一回> 第1回の特徴はインターンに応募する前から専門分野を持ち、知見や実績を既に得ていたということにあります。具体的には医学や看護分野でのインターン経験を持つ参加者や、農業分野での研究・学会発表経験を持つ参加者がいました。



た。前者は熱中症の初期症状を可視化し、高齢者の熱中症早期発見を目指すためのプロダクト開発を進めていました。また、後者は「土壌の健康づくり」に取り組み、小さな面積で安定的に高栄養な作物を生産する技術開発のプランを作成していました。インターン中も社員と専門用語を使って対等に議論ができるほどの専門性を既に有していましたが、二人にとってこのインターンに参加した大きな意義は「消費者にどう届けるか」という点を考えることができたことでした。

例えば、二人とも「どう高齢者の熱中症を早期に可視化するか」「どう環境負荷の少なく、効率的な肥料を作るか」という点には明確なビジョンがありました。しかし、「どうすれば高齢者/農家にそれを使ってもらえるか」という点に課題がありました。1週間という短い中でプロトタイプの開発までは進むことはできませんでしたが、製品開発やマーケティングの専門性を持つ社員とのディスカッションを通して、具体的な届け方に関してプランを策定できたことは大きな成果でした。

これは他のお二人に関しても同様で、最終的な成果報告に向けて、プランの対象となる人の生の声を聞き、現場の声を踏まえたプラン作成を進めていました。

<第二回> 第2回の特徴は、プラットフォームやネットワークへの関心が高いことです。具体的なアイデアとしては、「若者が持つ多様なスキルを社会人に共有し、相互に学び合うプラットフォーム」や、「働いていない高齢者が現役社会人の仕事を気軽に担える仕組み」、「性の多様性を考慮した保育のためにコンサルティングや、実際に現地へボランティアができるネットワークの構築」などです。

その他のアイデアも、「学生が使いやすい月経カレンダーのアプリ」や、「アプリを通して健康格差を是正し全ての人に健康を届ける」だったことから、社会問題解決のためにネットワークやアプリなど、大きなシステムを構想する傾向にありました。参加者は研修を通してフレームワークを得て、ビジネスの視点を持った社員とのディスカッションを通じてシステムを作り込むことができました。しかし、全体の課題として残ったのは「自分はず、何をやるか」という点でした。

大きなシステムそのものの構想はできるものの、いざ実施するとなった時のスモールステップを作れず、走り出しの準備が仕切れなかったという点です。

事後アンケートから見る 高校生/社員に対しての効果

<第一回> 高校生のキャリアに対する意識変化としては、したたかな進路選択をする傾向から、前向きに将来のことを考える未来展望へと変容する傾向にありました。また、高校卒業前に就きたい職業などの将来イメージを明らかにしておきたいという意欲も増加がみられました。これは、最後の感想に、「自分が思っているよりも、社会人は楽しく働いていることを知った」と言われていたことから言えるように、実際に現場に入ったこと



によって、ポジティブに将来を捉えることができるようになったと考えられます。また、今の自分が持つ主体性や実行力と社会で求められる期待値とのギャップの自覚、夢と関連した「リアル」な体験を積み、努力を重ねて挑戦したいという意欲の増加もみられました。社員の目線からは、半数以上の社員に「採用を検討したい」と思える高校生との出会いがありました。

<第二回> 高校生の変化としては、大きく分けてアントレプレナーシップ(起業家的行動特性)と進路選択や就職活動に対する意欲や関心の向上が見られました。アントレプレナーシップの面では、失敗を恐れないポジティブな行動や、周囲のアドバイスを受け入れて自分の不足を補う謙虚な姿勢、目標達成に向けて諦めないことや社会の持続可能性への意識に関して向上したという回答が見られました。

ロート製薬社員の反響としては、高校生とのアイデア創出ワークショップに参加した社員のうち66.6%が、学びの相乗効果を実感したと回答していました。具体的な声としては、「高校生の視点から見た社会課題を知ることができ、非常に勉強になりました」、「高校生の問題意識と純粋な情熱を感じ、一緒に過ごしていて癒された」という回答が見られました。

徳永さんからのメッセージ



Profile

徳永 達志

ロート製薬 広報・CSV推進部
広報・CSVグループ マネージャー

社会課題を意識した学生と触れることで刺激をもらう効果もあれば、次の世代が活躍・成長することに携われた喜びや社会貢献感を感じた社員も多かったです。なかなか一企業で受け入れられる人数の限界はありますが、このような動きが広がっていけば、日本の高校生が社会や会社に触れる大きな機会となる可能性を秘めていると思います。

IT×高校生インターンの実践

LINEヤフーコミュニケーションズ株式会社

LINEヤフーが提供するサービスの運営を担うLINEヤフーコミュニケーションズ株式会社では、福岡県立宇美商業高校の生徒をインターンとして2日間受け入れました。IT業界では珍しい高校生向けインターンシップが、どのような経緯で実施に至ったのか、そしてどのような手応えがあったのか。担当された江國淳子様にお話を聞きました。

インターン実施の経緯

金杉 まず最初にインターンの実施の経緯について伺いたいと思います。

江國 学校からお問い合わせがあったことがきっかけです。元々高校生インターンは、機会がなく実施していませんでした。ただ、生徒さん自らが弊社でのインターンを希望していると学校から伺い、それなら受け入れましょうということで実施が決まりました。

私個人としても、高卒新卒で就職活動をした親戚がいて、その様子を見ていて、進路選択に必要な情報を高校生の時期にもっと提供するべきなのでは？と感じていたことも実施に至ったきっかけの一つです。

金杉 生徒さんからの希望があったことに加えて、それ以前から高卒就職の情報不足に問題意識を持たれていたんですね。

プログラムを受けての高校生の様子

金杉 まずお聞きしたいのが、インターンプログラムの中で高校生はどんな様子でしたか？

江國 みんなとても自発的に参加していて、社員に積極的に質問してくれているのが印象的でした。IT企業に関する解像度が高まったことで、希望する職種が変わった生徒さんもいました。事前に伺った内容だと、参加した生徒さんの多くが、最初に志望していた職種がエンジニアやWebデザイナーで、その他は明確に志望職種は決まってないけど、漠然とIT企業に興味があったり、イラストが好き、とのことでした。ただ、IT企業にはいろんな職種があるので、座談会やワークを経ていろんな職種に触れることで、志望職種がエンジニアからカスタマーケアに変わった、Webデザイナーからイラストレーターに変わった生徒さんもいました。



Profile

江國 淳子

LINEヤフーコミュニケーションズ株式会社
コーポレートコミュニケーション部

	1日目	2日目
AM	オリエンテーション	グループワーク「LINEスタンプ制作・バナー広告制作」
	会社説明	
	社員とQ&Aセッション	
	座学「LINEの運営業務とAIの関係」	
PM	グループワーク「AIを使ったLINEサービスの改善企画体験」	成果発表
	成果発表	



金杉 具体的に、志望職種が変わった時にはどんなことがあったんですか？

江國 エンジニアからカスタマーケアに変わった生徒さんは、1日目午後の「AIを使ったLINEサービス改善企画体験」がきっかけでしたね。実際に企画を考えて、カスタマーケアの社員から「そのUIだとユーザーからこんな問い合わせがくると思うよ」と企画に対してフィードバックをもらって、カスタマーケアの視点でサービスと向き合うことの面白さに目覚めたようです。

金杉 実際にやってみて、リアルな現場に触れたことがきっかけだったんですね。

プログラム実施後の社員への影響

金杉 初めて高校生インターンを実施してみて、参加された社員の方にはどのような影響がありましたか？

江國 まず、高校生がそもそもサービスのユーザーなので、ユーザーの視点に触れることが自分たちの刺激になったと聞いています。

金杉 ご自身の手応えとしてはいかがでしたか？

江國 自分たちの仕事につきたいと思っている生徒さんたちに説明をすることで、自分たちの仕事の価値を再認識する機会になったと感じています。

あとは、高校生インターンを受け入れる価値を社員に理解してもらえたことも大きいですね。

高校生は就職・大学・専門と将来を見据えて自分のやりたいことの方角転換がしやすいので、このタイミングで支援できる良さを感じてもらえたと思います。今回参加してくれた社員の中には、「なぜ高校生なのかわからなかったけど、参加してみて価値



がわかった。」「高校生インターンってすごくいいね」と言ってもらえました。

メッセージ

金杉 最後に、高校生インターンシップの例もIT業界ではかなり少ないと思うので、検討されているIT企業の方に対してどんなメリットがあるかお聞きしたいと思います。

江國 そうですね。やっぱり生徒さんと触れ合う機会はありませんので、社員のモチベーションや企画にもいい影響を与えられるんじゃないかなと思います。

それからIT業界の仕事は子どもたちの間で人気になってきているようなので、体験ニーズも多いと思います。そのニーズに応えることで業界全体の将来的な活性化にも繋がるのではないのでしょうか。

金杉 ありがとうございます。アッテミーからも、もっとインターンシップの選択肢が広がるように頑張っていきたいですね。

Interviewer



株式会社アッテミー / インターン生

金杉 龍吾

Ryugo Kanasugi

青山学院大学4年生

工業高校におけるキャリア教育

佐野工科高校

大阪府の佐野工科高校では単なる就職先を選ぶための進路指導ではなく、人生全体の生き方を考えるキャリア教育に力を入れています。自分とマッチする進路を自己選択していくために、佐野工科高校ではどのように取り組んでいるのでしょうか。進路担当の赤穂先生と森栗先生にインタビューをしました。

現在の卒業後の進路傾向は？

東本 現在、卒業後の進路傾向はどのような形になっていますか。

赤穂先生 昔ながらのイメージそのまま就職8割ぐらいを超えていた時代もあったと思いますが、令和5年度の実績だと就職が65%、進学が35%、そのうち4年制大学・短期大学進学が15%程度ですね。その他が専門学校となります。

東本 進学という選択肢が増えてきた中で、工業高校に在籍する3年間の中でのキャリア教育においては、どういったことが進路選択に影響を及ぼしているとお考えですか。

赤穂先生 一つはやはり圧倒的に実習が多いということが進路選択に影響を与えていると思います。3年生になると週に10時間が実習形式の授業です。1年生は3時間ですが、キャリアについて考える授業が別途用意されていますので、計4時間が進路について向き合う時間になっていますね。

いかにプログラムを設計するか

東本 1年生からしっかりと積み上げていくキャリア教育にしようとしたきっかけはありますか。

赤穂先生 プログラムとして体系立ててやっていたわけではなく、過去にもそれぞれの学年で、そういう意図を持った取り組みはしていたと思います。210人一斉に入学してきて、2年生へ進級のタイミングで系と専科を選ぶというセクションがあるので、1年生に関しては、系と専科を決めるためにキャリアを考えるような授業がカリキュラムの中にあります。実際森栗と一緒に担任を受け持った時に、これってすごいなと。

将来を見据えて一旦全体図を見て、最終的に進路選択に目を向けていくという過程がすごく良いなと思ったんですけども、2年3年になると急に何か宙ぶらりんになるんですね。なかなかその流れが確立されてないな、というところを担任をやりながら思ったのが多分一番最初のきっかけだと思います。

東本 3年間を通した進路指導のプロセスを確立させていく上でどのような点を意識していましたか。

赤穂先生 プログラムとしてはまだできていないのですが、今年度キャリア教育を体系立てようというところで、今色々整理をし終わった段階です。それに関して、これから実際にやってみて微調整して精度を上げていく作業になります。

森栗先生 意思決定を生徒たちにある意味任せて、高卒の先の社会に出たときのイメージを持たせようというところで、広い視野でのキャリア教育、つまり高校だけじゃない、その先を見据えたキャリア教育をまず組み立てることに意識がありますね。生徒たちに意思決定をさせると言ったとしても、彼らの価値観ってすごく狭いコミュニティで形成されたものなので、それをいかに広げた状態で選択をできるかですね。というのも、今の子どもって選択をするってのがすごい苦手なんです。

一つは自己理解ができていない。もう一つは意思決定をする自信も含めて経験がない。意思決定が苦手な理由とその背景にあるものを整理しながら自己理解を深め、大人との関わりの中で探究心を育て、自己決定ができるような形でのプログラムを企画しています。

生徒とどう接するか

東本 高卒で就職を考えている生徒さんと、進学を考えている生徒さんでまたアプローチが違うと思います。進学を第一希望とする生徒さんが年々増えてきている中で、どのような点に気を配って、接していらっしゃいますか。

赤穂先生 就職進学に関わらず1年生のときは、一旦系・専科選択というところで一律に指導している形ですね。2年生に関しては“総合的な探究の時間”という自分の興味関心を広げる科目があるので、それを中心として卒業後何を学びたいとか、そういったところを考えることに注力しています。ただ本校で言うと、進学は半分ぐらいが指定校推薦で進学をして残りの半分が総合型選抜という形になります。

その総合型選抜も年々増えてきているような状況の中で、彼らが何を強みに進学をするかというやっぱり工業高校で何を学んできたかが軸になっています。

東本 一方で高卒で就職する生徒さんに関してはいかがでしょうか。

森栗先生 一番はマッチングで、自分がやりたいことと企業の求めているものが一致しているか、その確認は必ずしっかりやりなさいということですね。本校の強みとして企業と近いというのがあるので、先生方に色々情報聞いて、あるいは応募前見学で自分で見て確認をして、選考を受けるということはしっかりやっています。

東本 正直就職したいけど何をやりたいかわかっていない、みたいな生徒さんもやはりいらっしゃるのでしょうか。そういった場合はどのような声かけをされていますか。

森栗先生 絶対そういう生徒はいますね。絶対やってはいけないのが、企業情報だけを伝えることです。こちらとしても自身の経験や、価値観を対話を通して引き出していきます。それを踏まえた上で、マッチングできる企業を提案していきます。おそらく、何がしたいかわからないのは「知らない」というところから出てくると思っています。そういう生徒はこれまでに結構“働く”とか“就職”というところに目を背けてきた人で、大体接していくと、その生徒の特性であったりとか、強みというのが会話を通して出てくるので、それに合ったマッチングした企業を提案していく、それしかないかなと思っています。

いかに学校内の協力体制を作るか

東本 学校全体でキャリア教育に対する機運を高めていくには、何が必要だと思われますか。他の高校さんからお話を伺う中で、熱心な先生が個人単位で動き出した時に、それが学校全体の取り組みにならないというお悩みもありました。学校内の協力体制作りにおいてキーとなる要素はなんでしょうか。

森栗先生 それは課題ですね。課題ですけど、もう全ては小さいところから始まるということだと思います。まずやってみるところからスタートして、仲間を増やして行って、当たり前にしていくしかない。我々もそこにはなかなかたどり着かなくて、小さい



ところから始めたものがだんだん広がっていったという経緯があります。

赤穂先生 それしかないですよ。本当に課題だと思います。あとはきちんとやったことを実績として形にしておくというのは大切だと思います。

工業高校の魅力

東本 これまで色々学校内外での取り組みについてお伺いしてきましたが、改めて、工業高校で学ぶ魅力はどんなところにあるとお考えですか？工業高校と聞くとある程度進む道が定まっている人が行くんじゃないかとかという考えを持つ方が少なくないと思うんですけど、今お話を聞いた感じだとやっぱり全然そんなことはなくて、広い選択肢が用意されていると感じました。

森栗先生 おそらく中学生のお子様を持つ保護者の方は、高校を出た後どうなるのかを気にされると思います。そういう面ですと、就職だけではなくて、大学も偏差値的な学力だけではなく、実習含めきちんと学んだ生徒に対してそういった特色を認めた入試方法があります。なのでまずは校内で一生涯懸命頑張れば、そういう入試方法を生かして進学もできることが魅力の一つです。

私自身は普通科出身なんですけど、ここで教えてみて、圧倒的にアウトプットの数が多いと思いました。実際に手を動かして、形として出てくるモノが学びの振り返りとして生かされるというのは、ものすごい良いところかなと感じます。

赤穂先生 ですね。モノを作るための段取りやそれに到達するまでの技術を学んで最終的に完成させる経験は普通科ではなかなかありませんよね。逆算力が身につくような学習が日常的に用意されてるといのはすごく社会においては必要だと思います。

Interviewer



株式会社アッテミー / インターン生

東本 美紀

Miki Higashimoto

津田塾大学4年



西大和学園高校(富高先生) × 福岡女子商業高校(竹山先生)

Practice Cases 04

教員対談

////////////////////////////////////

近年、探究学習と結びつけた進路指導が実践されていますが、教員はどのような考えのもと、実践しているのでしょうか。この記事では東大・京大に4年連続で現役/浪人合わせて150名程度が合格している進学校である西大和高校と、就職が約2割、大学進学が約4割という進路多様校である福岡女子商業高校でそれぞれ進路指導を担当されているお二人と対談をしました。

各校の取り組み

東本 具体的にどのような取り組みを、どのような意図を持って、生徒さんに参加を促していらっしゃいますか。

富高先生 本校は中高一貫校ですが、高校に限定してお話すると部活動とは別で探究活動を何個か用意しています。その中の一つが私が担当しているAIP(アクションイノベーションプログラム)という活動です。

AIPでは二つのパターンがあります。一つは生徒たちのやりたいことに関して実際にそのビジネスのマインドから学び、必要なスキルを習得し、それを実現する事業を創出していくという、自分たちでやっていくパターン。あともう一つはアッテミーさんも入っていただいているPBL(課題解決型学習)ですね。来年度は商品開発と、地方創生、そしてインターンシップ、この三本柱でPBLの方も準備して、最終的にはプレゼンテーションや発表会で学びに昇華させていく流れとなっています。

竹山先生 体系立ててプロジェクトを運営していくというのはこれからの課題としてあるんですが、本校は外部の方含め気づけばいろんな大人がいる環境なんですね。例えば“博多ミツバチプロジェクト”というのがあるのですが、うちの学校でミツバチを育てて、蜂蜜を取って、それを実際に商品にして、利益を出すところまでやるプロジェクトがあったり、地域のスーパーと共同商品開発をしている小学校へマーケティングの指導をしたりしています。

とにかくプロジェクトが多いです。あとは学校の中でもキャリア発表会をするんですが、1年間でどういう学びをして、次はこういうことをしますという決意表明や、自分がどういうスキルを身につけたとか、自己肯定感が上がりましたとか、生徒たちはそう

いった点に関して発表しています。

東本 キャリア観のサポートはそれイコール進路実績として出てくるわけではないと思うんですけども、そういった取り組みは学校として何をゴールとして取り組んでいらっしゃるのでしょうか。

竹山先生 “ありたい姿を描けるように”ということを意識しています。夢は職業じゃないって話をずっとしてるんですが、学校だったりとか会社というのは、あくまで彼女たちがキャリアを積んでいく中で手段でしかないと思っています。好きなことを仕事にせず、会社でお金を稼いで好きなことは別でやるというのも、一つの人生だし、仕事をせず、自分は家庭でというのも一つの人生だと思うんですね。そこに何か彼女たちなりの人生の軸がある状態になることが、目指してるところです。



進路指導の姿勢を形作ったきっかけ

東本 今おっしゃった“ありたい姿を描く”というところに、キャリアの授業だったり探究の授業だったり、その定義づける

先生ってまだまだそんなに多くいらっしゃらないかなと思っています。竹山先生はなぜそこを、この学校の3年間を通じて生徒に何か育てたいと思われたんですか？何かきっかけとか原体験があったんでしょうか？

竹山先生 私が30代前半で子宮頸がんになったんです。そこで半年仕事を休むことになったんです。その時、私という人間から、教員という価値が無くなるのがすごく怖くて辛かったんです。その時に先輩から、「教員という仕事の代わりは、良くも悪くもいるが、竹山という人間の代わりはいないんだよ」と聞いたときに、仕事だけではなくて、自分がどういふふうに生きたいのかを考えないといけないと自分自身も気づきました。そのことを若い子たちにもっともっと若い時期から伝えたいなという経験の一つです。

富高先生 体験...そうですね。卒業生と再会したときに僕自身が思ったのは、今まで勉強をずっと頑張ってきて東京大学とかに受かった生徒の話してる内容が、大学の授業のこと、あとはバイトやサークル、好きな子ができたのかなんですね。その時「普通じゃん！」って思ったんです。あれだけ勉強して東大に入ったのに、なぜ他のアクションを起こさないんだろうと思ったんです。

それは僕は別に生徒たちが悪いわけではないと思うんですね。生徒たちは目の前の大学生活を頑張ってるんです。彼らは日本を引っ張っていくリーダーになっていく人材だと僕は本気で思ってるんですが、それなら、もっと大学に行くまでに興味関心を突き詰めて、目標を持つための動き方をちゃんと教えてあげないといけない。だから進路指導で僕自身は「何でもいから東大に行け」が一番最悪だと思ってるんです。その目標を見据えた上で大学に入れないと意味がないと思っています。

進路指導の課題感

富高先生 僕自身はその生徒じゃなくて、教員側の話だと思っているので、やっぱりそれに携わってる教員のスキルが上がっていかないと話にならないというのが僕の中ではあります。そのときにやっぱり僕が学校に言ってるのは、起業とかビジネス感がない教員っていいんですかそれかという話はしています。例えば生徒たちから大学に行ってこんな事業をやりたいんですって相談されたら、答えられますか？と思うんです。

生徒の可能性にちゃんと寄り添い、最終的に彼らが大人になって社会に出て何かしら活動していくための対応をする。そういう意味での進路指導がちゃんとできる教員がいないと、生徒の可能性が狭まっていくと思っています。

竹山先生 私もまず大人が高校生のとがりに対してついでにいたらと思っています。進路指導をしていくには、外部の方を紹介したり繋げたりできる、教員自体のソーシャルスキルや引き出しがないと難しいのかなと思っています。先生たちもどんどん子供たちと一緒に進化していくことが一番必要だと感じています。



企業への要望

東本 今課題感として「教員」というワードがお二人から出てきましたが、教員以外でいうといかがですか？例えば実際に関わる企業さんに対して要望はありますか？

富高先生 企業の方とか学校に入れられる方をお願いしたいのは、教育的観点を持って入ってきてほしいということですね。AIPもすごい大企業の方が入ってくださっても、言っていることが生徒に伝わらず、うまくいかないことがありました。内容をしっかり伝え、その生徒の成長や次の行動に繋げようという教育的な考え方を持っている方じゃないと、入ってもあんまり意味ないかなと僕自身は思っていますし、本校でのAIPはそういう方たちを揃えるようにしています。

竹山先生 企業の方が高校生に対してもっと期待感を持ってもらいたいですね。もちろん、期待して下さっている企業さんもたくさんいらっしゃるし、その期待に応えられていない面も現実としてあるんですが、どうしても「職場体験」という一過性のものになりがちなんです。大学生はインターンをどんどんやっていますが、社会全体の仕組みとしてそれをなんで高校生でできないの？と思うんです。

あとは本校が商業高校というのもあって、高卒の就職の子たちも一定数いるのですが、一方で進学希望の子が何で大学に行くかって言ったら「就職の選択肢が広いから」って言う子がいるんですね。それは間違った選択では全くないと思います。でも、高卒ということでどうして選択肢が狭まらないといけないの、と感じていて、高卒とか大卒とかの垣根が低くなっていくと、もっと自信持って羽ばたけるのにと思います。

東本 高卒でも大卒でも自分のキャリアを切り開いていけるような環境を、教育的観点を持った大人たちで作っていく必要がありますね。本日はありがとうございました。

Interviewer



株式会社アッテミー / インターン生

東本 美紀

Miki Higashimoto

津田塾大学4年



YOUNG PEOPLE - FILE 01

社会人4年目 イベントター兼クリエイター

komatsu さん

現在社会人4年目のkomatsuさんは廃れてしまった地元のライブハウスを、高校生バンドの支援やライブを通じて盛り上げる活動をしていました。その後高卒でインフラ系企業に就職し、副業でイベントター兼クリエイターとして働いています。

正社員として働きながら、ライブイベントだけでも年間100本以上撮影するというイレギュラーな進路を歩んだからこそ見える、彼自身のキャリア観に迫ります。

聞き手は高校時代にともに活動をしていた、アツテミーの金杉です。

▶ Episode 01

ルールがない方が わくわくする。

金杉 長年付き合ってきていまさら聞かという感じではあるけど(笑)改めてkomatsuが今のキャリアに至ったきっかけを教えてください。

komatsu 高校生の時一緒にやっていたライブハウスを盛り上げる活動が一番のきっかけだね。なかったら今頃真っ当に会社員してる。

金杉 どんなところが刺激だった？

komatsu 0⇒1を作る体験をしたところかな。自分たちで0からイベントやコミュニティを作るために、人を使ったり使われたりして、最高なこともキツイこともどっちも体験したことが思い出に残ってるね。紆余曲折あったけど、俺でもできるなっていう自信を持ってたと思う。

あとは、学校の外で頑張るものがあったっていうのは、多分俺の今二足のわらじにも生きてるんじゃないかな。

金杉 ルールを敷いた場所に行くじゃなくて、自分で踏み出して、場所を作っていくみたいなのかな？

komatsu そうだね。やっぱりそっちのほうわくわくするね(笑)ルールが用意されてるとね。俺はへそ曲がりだから脱線したがるんだよ。

▶ Episode 02

今の会社に行ったのも、 結果としてはよかった。

金杉 高3の進路選択の時にはどんなことを考えてたの？

komatsu まず大学は家庭の事情としても自分のモチベーションとしても、まあ行かないかなと思ってたね。

高校選びの時も工業高校に行ったのは働くことしか考えてなかった。

普通科だと時間を浪費してるだけで、工業高校行っても就職してる先輩もいるわけだし、なんか楽し、早く実家も出たかったって考えてたからね。

それで、高校の時と同じように0⇒1がやれる場所に行きたいと思って、アパレル系の会社のカメラマンとして「俺を採用してくれ！」って直接メールを送ってみた。

応募はできると聞いたから一旦親と学校に話してみたんだけど「学校と繋がりがある会社に就職してくれ」「安定した道を選んでくれ」って言われちゃって。

「いや別に先生が俺の人生決めるわけじゃないけどな」って思った。けどお袋も今まで育ててくれたからね。

実家出るまでは言うこと聞いて、それから辞めてやりたいことをやろうと思ってた。

金杉 そうだったんだ。結構不本意なところがあったんだね。

HISTORY OF KOMATSU

- 高校1年 工業高校に入学
- 2018年9月 金杉とライブハウスを盛り上げる活動を開始
- 社会人1年目 現在の職場に技術職として内定
- 社会人2年目 カメラマン・クリエイター・イベンターとして本格的に活動開始



初めから大学は選択肢にはなかったようだけど、「もし大学に行ってたとしたら」みたいなことって考えたことある？

komatsu うーん。あんまり考えないね。置かれた場所で全力で頑張るってほうが先だから。

思うことがあるとすれば、「世の大体の大学生は俺より優秀じゃない」って感じることもある。している経験が全然違うなって思うね。自分は仕方なく今の会社に行ったし、なにもない田舎に生まれたけど、高卒で働きながらも意外と俺ってやれてるじゃんって思ってる(笑)

だから、結果としてはよかったね。会社で働いたのも安定した収入を得ながら独立を考えられるし、一年目は頑張っって信頼を得たから、シフトを決める側の立場として働きやすくなったし、それは入ってみなきゃわからなかったことだね。最初からベンチャーに行ったらそういう余裕はなかったかも。

あとはベンチャーは裁量が多いイメージもあるから、自分がカメラの腕で成り上がろうって方向になって、今みたいにイベントとかやりたいことを自由にやるとかも考えられなかったかも。

金杉 逆に、今のインフラ系の会社に入ったときの気持ちってどんな感じだった？当時は全然この会社で成り上がってやるぞっていう雰囲気は見てあまり感じなかったけど、どんな風に考えてた？

komatsu 結局年功序列だからとりあえず無難にやってくかって思ってた。だけど最初に配属されたところに嫌な人が多くてやめてやろうと思ってたんだよね。



でも、後輩は半年おきに入ってくるからさ、せっかくやめる身なら、後輩のためにいい空間にして辞めてやろうと思って、「違うな」って思ったことは全部噛み付いてたね。

金杉 でも、噛み付くことが多い割には、結構上の人に気に入られているよね。

komatsu 仲良い先輩もいるしね、その人たちを裏切るようなことはできないし、違うって思ったことは違うって言うけど、正しいことなら、お金もらってる以上仕事するのは当たり前のことだから。そこに関してはやれって言われたことは責任持ってやってたね。そういうところがなんだかんだ信用されてるのかもしれない。

金杉 それでは、最後にkomatsuの今後の展望を聞かせてください。

komatsu 会社をやめてやりたいことで仕事していくために、音楽以外でもきちんと金のなる木を作っていきたいなと思って。同じ年齢の平均くらいは稼げるようになりたい。

あとは自分が手伝ってるライブハウスでもっと信用されて、もっと大きい仕事を任せられるようになりたいね。単に使われる側じゃなくて、やっぱりこの店は任せなさいよ。って言える状況にしたい。

イベントの面も、メジャーに出ないアーティストをいかに発掘して育てるかはライブハウスの使命だから、育てる責任を持って作っていきたいね。

あと、高校生の時活動してたライブハウスは、他では見られないくらいアーティストと客のグルーブ感がすごいと思っていて、そういう繋がりに重きを置いたイベントもやっていきたいと思っています。

金杉 ありがとう！今後も応援しています。

Interviewer



株式会社アッテミー / インターン生

金杉 龍吾

Ryugo Kanasugi

青山学院大学4年生



YOUNG PEOPLE - FILE 02

マレーシアのモナッシュ大学に在学する大学3年生
長崎出身の被爆3世

山西 咲和 さん

マレーシアの大学に通う山西さんは、高校時代に平和をテーマに活動しており、授業やタンザニア留学をしていました。卒業後は自分を見つめ直すためギャップイヤーをとり、最終的には学問の必要性を感じて海外大進学を決意しました。そうした決断の背景にはどんな出来事があったのでしょうか。

▶ Episode 01

今の活動内容

金杉 まず初めに、今の活動内容について教えてください。

山西 昔ほど目立った活動みたいなのはあんまりやってないんですけど、日本にいるときに、高校時代にやっていた平和教育の活動を半年に1回ぐらいのペースですしています。

具体的には、学校で長崎の歴史や、道徳的な教育も含めて平和教育をぼちぼちやっています。目立った活動としてはそんな感じ。それ以外は普通に海外の大学での生活を満喫しています。主に国際関係学とか、今期は安全保障や災害学の授業を取っています。

▶ Episode 02

「大学に行くのは今じゃないなって」

金杉 それじゃあ、今のキャリアに至った経緯を聞きたいと思います。

山西 今のキャリアに至った経緯としては、高3の夏にタンザニアにボランティア留学をしたことがきっかけで結構大きく変わったね。

その時は生徒も先生もすごい受験に集中してたんだけど、自分

が本当に進みたい進路ってこれなのかなみたいな、大学に行くことが私に合ってるのかなとか、疑問をいっぱい持ち始めたんだよね。

自分の納得のいく答えが見つかるまでは大学行けないなっていうふうに思ってた。大学はすごい大きな自分の未来への投資だと思ってたから、今じゃないなって思って。

だからこそ、自分が今後も平和教育に携わりたいのか、そのために大学に行きたいかを考えるために留学に行ったんだよね。そのときアフリカの人たちに、「ポレポレ」っていう「ゆっくりゆっくり自分のペースでいいんだよ」っていう生き方をすごく学んだから、それにしがつて、もう自分の思うままに、枠を外れてちょっと行ってみようと思って、ギャップイヤー¹を取りました。ギャップイヤーのときは多くの人に会っていろんな人生の先輩を見つけるために日本各地を転々としてたね。とてもハイテンションに過ごしていました。

ただ、ある時、大阪の中学校に平和教育の講演を頼まれて、そこで「どんな世界で生きてみたいと思う？」って女の子に聞いてみたんだけど、その子が小さな声でみんなの前で勇気を出して、「誰も傷つかない世界がいい」って言ってくれたんだよね。

でも、当時の私からしたら「そうだね、それってすごい素敵だね」みたいな薄っぺらい答えしかその子に返せなかったのがショックだった。

後から聞いたんだけどその子は家庭がづらい状況で、授業に参加できない状態にあったらしくて、そんな彼女が勇気を持ってみんなの前で発表してくれたんだよね。そしたら「生徒さんの世

HISTORY OF YAMANISHI

- 高校2年 平和教育に携わり始める
- 高校3年 タンザニア留学
- 高校卒業後 ギャップイヤーをとり日本を旅して周る
- 平和教育への思いに立ち帰り
マレーシアの大学に進学



界の入口になりたい」とか、口だけは大きいことを言ってたけど、自分に中身がないような気がした。そのときに責任を感じて、本気で学問をしたいなと思って大学進学を決めました。

1 ギャップイヤーとは、大学入学前や在学中、卒業後就職するまでの間などに、親元・教員から離れた非日常下で社会体験活動を行う機会のこと

▶ Episode 03

ギャップイヤーの効果

金杉 ギャップイヤーを通じていろんな人に会いながら、今までの自分を見つめ直すことができたんだね。全体的な話に移るけど、他の人にギャップイヤーを説明するなら、どんな効果があると思う？

山西 そうだね。一番は、余裕がないなら取るべきかなと思う。学生ってめっちゃ忙しいし、外で活動してたらさらにいっぱいいっぱい、自分が納得できる選択をする時間とか心の余裕が無くなると思う。それで後悔してる同級生の子もいたりしたから、自分は余白の時間を持って、自分がどうしたいのかを考えることができた1年っていうのはすごい大きかったかな。

金杉 なるほど。ちなみに、こうするとギャップイヤーが成功する。みたいなコツってあるのかな。そもそも成功とかあるのかな。

山西 余裕がなくて考えられないマイナスの状態からゼロに戻るイメージだから成功とか失敗はあんまり感じないかな。学校っていう組織から離れて、自分の意思で自分の時間をどう使うか。そういう選択を自分でする期間がギャップイヤーの中にはすごく多くあると思うから、決められた時間に大学の授業に行かなきゃいけないわけでもないし、その過ごし方をどうしなきゃいけないかっていうのを、自分の意思決定をすごく何度もさせられる。毎日が夏休み最終日みたいな焦りがある。そういう経験をしたからこそ、自分が何者になりたいかをはっきりイメージできたと思う。

金杉 既存の価値観から離れて、自分の選択ができる時間というイメージだね。



▶ Episode 03

メッセージ

金杉 それでは最後に、大人に対してメッセージをお願いします。

山西 やっぱり大人の人からしてみたら、今まで自分が見てきた基準に当てはめてしまうことがあると思います。だからこそちょっと自分の知らない経験をしようとしている子供とかを見ると、不安になることも多いと思うんだけど、でもそこを信じて任せてみる。それが、親とか、大人たちにとっても新たな学びを運んでくることにつながると思います。だから、信じて任せてやらせてみるのはすごく素敵なことじゃないかなと思います。

金杉 親が心配しすぎるとそれもそれで自分の選択じゃなくなってしまうそうなので、信じるっていうのは大事なポイントですね。ありがとうございました。

Interviewer



株式会社アッテミー / インターン生

金杉 龍吾

Ryugo Kanasugi

青山学院大学4年生



YOUNG PEOPLE - FILE 03

農業高校での経験を生かして経営学部へ進学

中島 知也 さん

造園について農業高校で学んでいる中島知也さんは、自身の経験や専門性を強みに卒業後は経営学部に進学を決めました。農業系の学部を選択する高校生も多い中で、どのような背景があり、そうした進路を選択したのでしょうか。

大学全入時代に差し掛かった今だからこそ見える、専門学科出身ならではの進路選択の様子に迫ります。

▶ Episode 01

園芸高校での学び

吉田 よろしくお願ひします。中島さんは園芸高校でどんなことを学んでいますか？

中島 園芸高校は実業高校で、環境と造園について学んでいます。環境については具体的に、sdgsや、人種問題、エネルギー問題、汚染問題、リサイクルとか、やっています。

また、造園に関しては日本庭園やささまざまな種類の竹垣など、実践的な庭の製作をいっぱいやってます。石を据えたり、竹垣を作ったり、植栽を植えたり、造園技能士検定2級検定の練習をしていました。

▶ Episode 02

高校選択の理由

吉田 なぜ普通科ではなく実業高校に進学をしたのですか？

中島 実践的なスキルをつけたかったからです。中学の同級生もほとんどが当たり前に普通科に進んでいったけれど、普通科に通うより実業高校に通う方が面白いと思ったから行きました。中学校の授業で環境問題をやった時に、これからの社会では「こういうことが大事にされてくるんやろな」って思いました。自

分の将来的にも環境を学んでたら強いかな、あとはやったことないことをやった方が楽しいし、という思いです。

実業高校を選んだのは、元々、自分はものづくりが好きなので、そこで工業高校に行くか考えたんですが、工業は機械がいっぱいあったんでちょっと扱えるか自信がなくて。その時に「造園って道があるで」って中学の先生が教えてくれた時に「それも面白そうやな」と思って一回学校見学に行ってみました。ちゃんとやることを聞いてみて、自分が1個ずつ頑張ったことが庭の完成度に出るんやな、と思ったんです。その時に「造園って絶対楽しいだろうな」と思って進学を決めました。

▶ Episode 03

卒業後の展望

吉田 実業高校で環境問題や造園を3年間学ばれたわけですが、高校卒業後はどんな進路を歩む予定ですか？

中島 4年制大学の経営学部に進学が決まっています。

吉田 そうなんですね！実業高校からは就職する人も多く、進学する場合は関連する学部・学科を選ぶことが多いですが、造園の資格や環境の勉強をした中で、なぜ経営学部に行くことにしたのですか？

中島 経営学部に行こうと思ったのは、実は中学校の時から元々経営を学んでみたいという思いがあったからです。自分の親戚の子が経営学部だったので、ちょっとそこで興味持まし

HISTORY OF NAKASHIMA

- 中学時代 親戚の勧めから、経営やマーケティングに興味を持つ
- 2021年4月 造園に魅力を感じ、園芸高校に入学
- 2024年3月 園芸高校を卒業
- 2024年4月 四年制大学の経営学部に進学



た。親戚の子が税金の話とかめっちゃわかりやすく説明してくれてお金の動きに興味がわいてきたり、「自分で1からものを作るのが好きなんだ」という話をしたら、マーケティングという道があるよ、と教えてくれました。自分のアイデアが、形となって多くの人に届くんやったら面白いなあと思って、中学の時に、高校卒業後はマーケティングを学んでみたいなのというのが先にありました。

吉田 そうだったんですね。高校では普通科に行って、それから経営学部に進学する道が一般的なかと思うのですが、なぜ実業高校を選んだんですか？

中島 これめっちゃ単純なんですけど、大学生で経営やマーケティングを学ぶ人は多いから、その時にやっぱりこう自分しか経験できてないという珍しいものがあった方が将来強みになるかなと思って。農業や造園を選んで、いろんな経験をした方が新しいアイデアが湧くと思ったからですね。

普通科から進学してきた人が頑張ってる間に、自分らは土を触ったり、環境のことを研究して大会で発表したり、地域のひとと協力しながら企画を成し遂げたり色々な経験してきたから、強みがあるなと感じています。

あとは、暑い夏も寒い冬も外で実習することが多いんで、簡単に諦めるということがないんで。忍耐強くとか、ちょっと諦めが悪いって言ったら言い方悪いけど、1個のことを頑張ってる力がついたなって思っています。

吉田 物をゼロから作る経験を高校時代でする事って、これ

から経営学部で勉強していくことに役立ちそうですね。大学卒業後はどういう将来像を描いてるんですか？

中島 まだぼんやりとですが、人々の生活を楽にしたり、役に立つサービスを世の中に広げる仕事ができたら嬉しいです。高校3年間で暑い中ものをつくる大変さや、体力いるとか、農業などはなかなかお金が稼げないとか、0からものを作ることの難しさやしんどさみたいなことも経験してわかるようになりました。そこに対して共感できることを活かして、たくさんの人に使ってもらいつつも、作り手が利益を得やすい、そういうマーケティングをしたいなと思っています。

▶ Episode 04

進路選択で大事なこと

吉田 進路の選択をした時になにか大事にしていた事はありますか？

中島 自分がしたいことをするのをすごく大事にしました。自分がしたいことをやってみようと思って、それを頑張ってるやりました。

吉田 やりたいことがないというのも結構10代の高校生からよく聞きますが、そういうのはどういう風に思いますか？

中島 「自分がよくやってること」について考えることが大事だと思います。ずっとやってることから広げて考えていけば見つかるんじゃないかと考えています。自分がそれを好きな理由を考えて、それがわかったら、その「好きな部分」ができるような場所がないかなと考えてみてほしいです。

吉田 素敵ですね。お話しいただきありがとうございました！



Interviewer



株式会社アッテミー / 代表取締役

吉田 優子

Yuko Yoshida

「早活人材のその後」を知る調査

数値から知る

この記事とそれに続く大学生インタビュー調査の記事は、高校生時代に「活動」したその後にフォーカスすることで、よりリアルな様子を捉えることを目的としている。

高校生時代に活動を始めた若者の中には、卒業後も活動を続けて発展させていく人もいれば、活動をしなくなる人もいます。

この記事で着目しているのは、①「なぜ活動を続けられているのか、やめてしまったのか」、②「仮にやめたとしても、どのように今に活着しているのか」という点だ。①は、若者が自発的な活動を続けていくためにはどのような周りの支援が必要なのかを知ることが目的としている。②は、やめたことをネガティブに捉えるのではなく、本人のキャリア選択の中で変化が生じている可能性を知ることが目的としている。

このアンケートについて

この記事は「早活人材」を量的な側面から見ることで、支援のあり方のヒントを得ることを目的としている。このアンケートの協力者はアッテミーがアプローチできる大学生に限られているため、早活人材全体に対して適用しうる結果とは言えない。しかし、今後早活人材に必要な支援を考えるための一つの足掛かりとして、現場からどのように見えているかという点を知るにあたり参考にしていただければ幸いです。

アンケート協力者の属性・特徴

アンケート回答者の属性

サンプル数50人(うち活動経験者30人)

学年 大学1年:22.0% 大学2年:22.0%

大学3年:40.0% 大学4年:16.0%

活動内容

7割がボランティアや学生団体、NGOでの活動で、4割程度がビジネスコンテストやインターンを経験している。

01

活動の継続状況とその理由

活動を変化させながら継続する

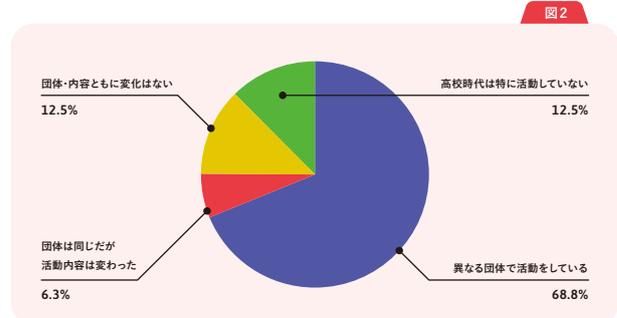
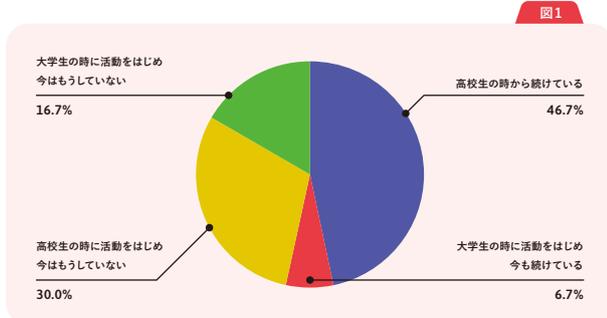


図1から、半数近い回答者が今も活動をしていることがわかるが、図2によればその68.8%はずっと同じ団体で活動をしているのではなく、異なる団体で活動をしている。このことから活動継続の支援を考えると、一つの団体がその人のニーズに応えるというよりは、自分の成長や変化に応じて自律的に団体を選択できるような支援が可能性として浮かび上がってくる。続いて、継続状況の理由について聞いた設問の結果を紹介する。

活動を継続中の回答者は、半数以上が「取り組んでいる問題への意識や使命感」の強さを活動継続の要因として挙げていた。ほかに高い要因としては、「活動内容に満足している」ことや「周りの大人の支援」がある。

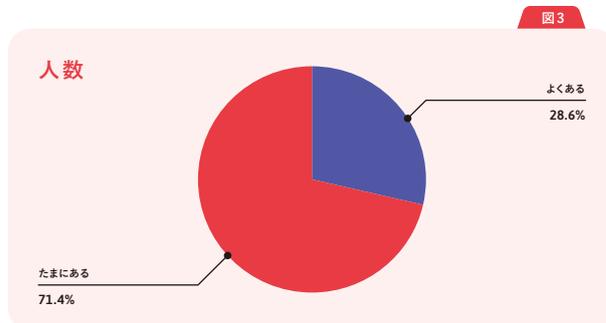
活動をやめた回答者は、半数以上が「学校のカリキュラムだったため卒業と同時に終了したから(学外のプログラム終了も含

む)」、「部活や勉強で忙しくなったから」と答えている。35%が「大学進学してから興味のあることが見つかったから」「コロナで活動が制限されたから」と答えている。他に特筆すべき点として、「引越したため」という回答が「その他」として4件ほど来ていたことが挙げられる。上京・引越した若者が引越した先で自分の参加したいと思うような活動に出会えないという情報格差の問題も示唆されている。

この二つの結果をまとめると、続けている人は使命感がベースにあり、その上で活動内容への満足感や大人からの支援があることで続けられる。やめた人の結果と対照的に考えれば、使命感がベースにあることで学校のプログラムに活動が左右されない自律性を持ち、多少忙しくても活動を続けていくことができるのではないか。

「以前していた活動経験が、やめた後になって活かしたと思うことがありますか」という質問に対して、「よくある」が28%、「たまにある」が71.4%で、「あまりない」・「全くない」という否定的な回答が0であることから、やめた人でも何かしらが活かしていると考えられる。具体的な役立ったものを見ていくと、「大学の授業を理解することや研究すること」や「授業のグループワークの際に発言したり場を回したりすること」に全ての人が回答している。そのほか、「サークルなど団体の運営」や、「資料作成のスキル」にも78.6%の人が活かしていると回答している。「周囲に流されず自分なりのキャリアを歩むこと」は他と比べると少ないながらも、半数以上の人が回答している。

少なくとも、早期での活動経験が大学での取り組みやアクティブな学びに活かしていると考えられる。



Q.【よくある・たまにあると回答された方】どんなことに過去の経験が活かしましたか？

全14名中

- | | | | |
|------------------------|----------------|--------------------------|----------------|
| ● 大学の授業を理解することや研究すること | 14名
(100%) | ● 語学力 | 6名
(42.9%) |
| ● サークルなどの団体の運営 | 11名
(78.6%) | ● 資料作成のスキル | 11名
(78.6%) |
| ● 授業の際に発言したり場回ししたりすること | 14名
(100%) | ● 周囲に流されずに自分なりのキャリアを歩むこと | 9名
(64.3%) |

前述した通り、やめた人であっても大学での取り組みに経験が活かしていることがわかったが、最後に活動経験のある人とない人の大学での様子の差を見ていく。まず満足度から見ていくと、活動経験がある方が満足していることがわかる。

具体的な満足しているものについて見ていくと、課外活動経験がある方が「学びと歩みたいキャリアの関連」について満足できていることがわかる。しかし、「学ぶことそのものの楽しさ」は経験の有無に関わらずどちらも40%で、「友人との関係性」については課外活動経験があるほうが満足している割合が少ない。高校生の時にしていた活動が学部選び等に活かして満足できるものの、友人の関係性にあまり満足できていない可能性がある。関

係性に満足していると答えない要因については今後も検討が必要だ。

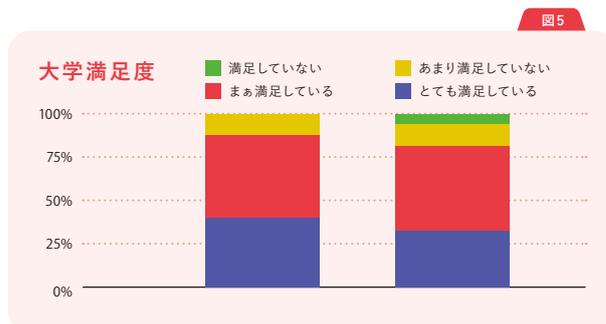


図6

課外活動経験	周囲の学習意欲	学びと活動との関連	学びと歩みたいキャリアの関係	友人との関係性	学ぶことそのものの楽しさ
あり	5名 (16.7%)	14名 (46.7%)	16名 (53.3%)	14名 (46.7%)	12名 (40.0%)
なし	3名 (15.0%)	8名 (40.0%)	7名 (35.0%)	12名 (60.0%)	8名 (40.0%)

「早活人材のその後」を知る調査

語りから知る

調査全体の趣旨は前ページ導入で説明をしているが、この調査は、アンケートでは拾いきれない、活動がどのようにその後のキャリアに影響していったかというプロセスに焦点を当てている。計11人に1時間程度インタビューを行なったが、紙面の都合上5人に絞って考察している。

本稿で取り上げる大学生

大学生	高校時代の活動	大学進学後の状況
Aさん	AO入試を機に1on1やワークショップに参加	学生団体を1つ、インターン1社、勉強会を週2回開催
Bさん	留学・学校の探究活動・学生団体	学内のプログラムやイベント参加
Cさん	演劇とSDGsをテーマに留学・NGOボランティア	ボランティア団体を休会し、そのまま参加していない
Dさん	航空をテーマに留学・学生団体に活動	進学後に余裕がなくなり活動をしなくなる。 携帯販売のバイトから個人事業主に。学祭実行委員会
Eさん	学生団体に所属後退会。 SNS上での学習・交流コミュニティに所属	映像配信部に所属。学内外で映像撮影や制作

01

場所を移しながら継続していくというスタイル

先ほどのアンケート調査では、一つの場所に止まって活動を継続するのではなく複数団体への所属と他団体への移籍をする中で活動を継続している結果が出た。その一つのあり方はAさんのスタイルから伺うことができる。Aさんは過去に2つの団体をやめたことがあるが、その理由は外的要因が大きい。運営がほとんど機能しなくなったこと、他の活動が忙しくなったことで

活動を「絞る」必要を感じ、休会していたら団体がなくなったことを理由として話していた。

このことから、学生団体は短命であることが多く、団体の移籍や複数所属をしなければ継続的に活動することが難しいことがわかる。また、コミットしたいものにに応じて活動を「絞る」という動きがあることもわかる。

02

活動を絞る基準とは

Aさんは基準として、「事業として可能性と共感性があるか」という点を挙げていた。これは事業として継続的に取り組めるような可能性がありつつも、利益以外の社会的な意義があることだ。また、Aさんは自身が代表を務める学生団体以外には「規模

が大きいところなら面白いけど、今から入ることはあまりない」と話していた。この理由は事業の可能性の側面によるもので、学生団体に継続的にアプローチすることが難しく、企業でのインターンに重点を置く傾向が現れている。

03

活動をやめても関心は続いている

今活動をほぼやめた層のやめた経緯は多様だが、2つの共通点を見出すことができた。一つはバイトや学業の忙しさ、団体の解散、そして親による制限があった。Bさんは「授業が忙しくて活動できなかった」という声があり、Cさんは親から「社会問題よりも稼げることをやりなよ」という介入があったと話していた。また、活動していなくとも2人のキャリアとしては、社会問題に対する

意識が残っていたことが特筆すべき点だった。Bさんは、「何がやりたいのかははっきりしない」としながらも、ずっと関心のあった貧困問題に関するキャリアについても考えている。また、Cさんは職業としての社会問題解決の要素は少ないものの、社会問題に関して友人を巻き込んだ議論をよくしている。

04

居場所としての「活動」

今回のインタビューでは活動を「居場所」として捉えるような語りもみられた。それには大きく分けて二つの意味があった。一つは「安心できる場所」としての捉え方だ。

この白書で別途取り上げた山西咲和さんは、学校では高校3年時の留学を止められ、進路は国公立進学への圧力がかかっていた。また、自分と同じような人が学校におらず、過ごしづらさを感じていたと話していた。しかしそれでも留学へ踏み出し、ギャップイヤーを選択することができたのは、活動を通して学校

の価値観とは異なる価値観を共有する仲間に出会えたからではないか。インタビューを通して山西さんは「学校では問題児扱いされている自分が真面目なんじゃないかと思えるくらい面白い人がいた」、「多様性が肯定される場所があった」と話していた。学校の中では満足できない状況に置かれていたとしても、仲間との関わりの中で自分自身を肯定し、周囲の大人に対して抗うことができたのではないか。

05

「あこがれの場所」

もう一つは「あこがれの場所」としての捉え方だ。Dさんは高校生時代に山西さんと同じく、留学の奨学金プログラムに参加したことで、東京でモチベーションの高い仲間に出会うことができた。それはDさんにとって、「あこがれの場所」であった。

この憧れは、たとえ活動にアクセスできなくとも、当人のキャリアを切り開くきっかけになったと言える。Dさんは大学進学後は学費のためにバイトをしなければならず、活動する余裕がなくなってしまった。しかし、携帯販売のバイトをしている中で評価されたことで、別の会社に引き抜かれ、新規事業会社の社長を打診されるなどのチャンスに繋がることができた。その理由として、「高校生の時、リーダーシップをとってエネルギッシュに活動する環境に踏み出せたから、今の評価がある」とDさんは話す。具体的にはDさんは「物を言う大学生」と呼ばれることがよくあり、「自分の意見をきちんと伝えられる」、「自分から提案ができる」と褒められることがあるとのこと。これは、早期の活動が憧れや刺激をもたらし、本人のキャリアに大きなインパクトを産ん

だ一例と言えるのではないか。

しかし二つ目の例でDさんが経済的な事情で活動から離れたことから言えるように、そして「場所」として捉える以上は、「活動にアクセスできない人」の存在もいることを見逃してはいけない。Eさんは、千葉県北東部に住んでいたが、周囲の資源の問題で活動にうまくアクセスできなかった。Eさんは東京の活動やコミュニティに参加していたが、地理的な問題で頻繁に参加できず、そのまま表立って活動することはなくなってしまった。ただ、Eさんは大学進学を期に活動にアクセスすることができた。Eさんは地方私立大学に通っており、当人は「Fラン大学(ボーダーフリーの大学)」と表現しているものの、そこで借りれる撮影機材や機会をうまく活用することで高校生のころよりも活動することができた。近年、大学の数が増え続けている中で「数を減らすべきだ」という主張もあるが、地方にいる若者にとって、一部ではあるが、それが自分のやりたいことを突き詰めるための資源を提供してくれる存在であることも考えられる。

06

まとめ

分析の客観性や全てを取り上げられなかったことに課題は残り、今後とも検討を続ける必要がある。しかし、今回の調査を通して得られたことは、学校や家庭を離れた場所の重要性である。特に後半の居場所に関する部分の学生は、学校から積極的に働きかけられた結果、活動にアクセスしているわけではない。それが活動を通して学校や家庭とも異なる価値観にアクセスすることができたということだ。

もちろん、学校を活動の拠点としたり、出会いの場を作る動きは重要だ。しかし、日々教員から評価され、固定的な友人関係のある学校だけでその場がうまく機能するか、という課題もある。その中では、探究の授業が生徒の自由な発想によるものではなく、教員への忖度からなるものになる懸念もある。

学校の実践を育てつつも、独立した外部が育つ環境づくりも求められている。そのために高校生団体に対して自治体や地域住民、企業が支援する策も必要ではないか。

Interviewer



株式会社アッテミー / インターン生

金杉 龍吾

Ryugo Kanasugi

青山学院大学4年生

Q. 高校生に必要な環境のヒント 若者にいかにして力を与えるか？

最近、私たちアッテミーには、全国の高校の先生からのお問合せをいただくことが増えてきた。お問合せ内容に共通しているのは、インターンシップ、探究授業などを活用して「高校生と社会との接点をつくりたい」ということ。これまで日本では教育と社会は混ざり合わない別のものとされ、教育から仕事への移行は「就職」という形式でなされることが多かったため、探究学習が義務化になったここ数年の動きなのだ実感する。ここでは、日々、高校の先生や高校生、企業とコーディネーターとして接している立場から、今の高校生たちに必要と考える環境について触れたい。

さて、高校生の約18%が卒業後に就職をするが、高校生にとって実は「職業選択の自由」は、厳密に言えば保障されているとは言いがたい。日本国憲法(昭和21年憲法)第22条第1項においては、「何人も、公共の福祉に反しない限り、居住、移転及び職業選択の自由を有する。」と規定されているが、高卒での就職を希望する高校生たちは、通っている高校に届いた求人票の中から選ばなければならない。しかも選択できる期間が1ヶ月あまりと短く、職場見学に行ける企業の数も多くて3社程度。現行のシステムである一人一社制度が、短期間で、より多くの生徒を効率的に就職先にマッチングできること、学業への影響が少ない、心理的負担が少ないという「進路保障」につながる効果があることも否定できないという前提を踏まえても、社会との接点が乏しい高校生にとって、卒業後の就職先を決めるにはあまりにも時間も選択肢も不足している。

もっと遡ってみると、入学する高校を選択する時点で卒業後の進路は概ね決まってしまうと言っても過言ではない。教育と社会との接続を進める手法の一つとして期待されている「探究授業」。仕組みとしては2021年から全国で義務化になったが、進学校か実業校か、そして担当の先生の意向がどのようなものであるかによって取り組みの内容が千差万別である。探究学習への考え方も様々なので、最近よく聞く言葉を使うならば、さながら「高校ガチャ」が発生している。中学生が高校を選択する時点で、概ねの進む道、すなわち進路が決まってしまうのが現実だと言えるだろう。

ただ、本書で紹介しているのは、そのいずれでもない形で社会との接点を持ち、活動をした経験がある若者たちだ。

最近の若者たちを総称して「Z世代」と呼ぶことがある。

毎日のように「多様性」という言葉を耳にする現代において、若者たちを「Z世代」と一括りにして評すること自体、おかしなことのように思える。それだけ、「大人たち」は自分たちの頃とは異なった環境で育った今の若者たちとの関わり方を相当模索しているのにも関わらず、高校生の社会への接続、高卒就職の仕組

みは戦後間もない頃から変化していない。社会の、大人たちに都合の良い制度を、私たち大人は今も、自分たちに都合よく継続している。これだけ社会が変化しているのに、戦後の高度成長期から変化していないのだ。

もっと、若者たちの社会への接続、18歳の選択を自由で、自主的で、自律したものにできないだろうか。高校生のうちに、社会との接点をより多く持てるようにできないだろうか。探究授業やアントレプレナーシップ教育がその役割を担うと期待されてもいるが、誰しも将来必ず「働く」ことになる、すなわち「仕事」を理解するために有効な手段の一つがインターンシップだと私たちは考えている。

3年間という短い期間ではあるが、その後の長い人生に多大な影響を及ぼす高校生時代。この、多感で吸収力があり、最も成長する時期に卒業後の進路がいかなるものであっても「社会」を知る機会を増やすことのデメリットは、ほぼ無いのではないだろうか。

大学生のインターンシップがここ15年くらいで大きな変化を遂げているが、高校生のインターンシップは更に定義やルールも多種多様で、高校や企業、高校生それぞれに抱くイメージが一定ではない。では、どのようなインターンシップが望ましいのだろうか、どのようなインターンシップであれば、参加しやすいのだろうか、成果が出るのだろうか、高校生にとっての学びになるのだろうか。

この問いを深めていくために、私たちアッテミーでは「高校生インターンシップ研究会」を今年の夏に立ち上げ、全国の高校の先生や研究者の方々と、高校生インターンシップのさまざまな形、望ましいあり方について検討する場をもっていく予定である。18歳の選択を豊かなものにするために、皆様と考え行動していきたい。

この白書を手に取ってくださった皆様のご参加を、お待ちしております！

高校生インターンシップ研究会

高校生のインターンシップ研究会について、今後の情報をご希望の方は、こちらのQRコードからご登録ください。



編集後記

白書の制作全体を通して感じたのは、有識者による実践や考え・若者のキャリア選択のあり方の多様性でした。より詳しいお話を伺えば伺うほど、高卒就職や探究、早活人材のキャリアなど、それぞれの世界が広がっていることがわかり、「キャリア選択」という言葉の持つ意味の幅広さがわかりました。それと同時に、まとめることで浮かび上がった共通性もありました。

また、有識者の皆様の社会に対してのマクロな部分から、実践や若者の様子といったミクロな部分を往還することは、自分の周囲とその集合体である社会をより深く理解する作業であったとも感じています。そうした作業の追体験が少しでもできるような白書であれば幸いです。

初めての試みであったため文章や作業の進行にも拙い部分があったと存じますが、それでも白書の制作に協力してくださった専門家、企業、調査協力者の皆様方には大変感謝しております。ご協力いただき、誠にありがとうございました。

この白書が、高校生のより意志ある、豊かな選択が生まれる環境作りのヒントになれば幸いです。

株式会社アッテミー
高校生キャリア白書編集部

[制作]

株式会社アッテミー

高校生のキャリアを創る

株式会社アッテミーは、「18歳の進路選択を豊かに、そして意志あるものに。」というビジョンのもと、高校生と企業とをつなぐサービスを展開する企業です。高校生向けインターンシップサイト『ATTEME』を運営しています。また、教育関係者向けに、勤労観・職業観を育むプログラムの提供などを通して、高校生が卒業後の進路について、豊かな選択肢の中から意志をもって決められるようサポートしています。

キャリア選択の全体像

意志ある、豊かな選択のための未来事例

2024年7月1日 発行

著者 株式会社アッテミー
発行者 株式会社アッテミー
発行所 株式会社アッテミー
〒550-0002
大阪市西区江戸堀一丁目14番1号
平和相互肥後橋ビル301
TEL : 06-6180-6130 / FAX : 06-7632-3010
<https://atteme.com/>

デザイン・制作 福井浩太 (FOURTEEN)
執筆協力 赤穂遼 (佐野工科高等学校)
江國淳子 (LINEヤフーコミュニケーションズ株式会社)
komatsu
佐藤真久 (東京都市大学)
竹山祥世 (福岡女子商業高等学校)
徳永達志 (ロート製薬株式会社)
富高雄介 (西大和学園高等学校)
中島知也
古屋星斗 (一般社団法人スクール・トゥ・ワーク)
毛受芳高 (一般社団法人アスバシ)
森栗晃史 (佐野工科高等学校)
山西咲和
執筆 吉田優子
伊藤麻衣子
金杉龍吾
東本美紀
編集・構成 金杉龍吾

©2024 株式会社アッテミー

本書に記載している情報は2024年6月時点のものです。

無断転載・複製を禁ず